The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在日汉语教学下的日本学习者动宾搭配习得
Author(s)	李, 佳
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　李　佳　　）	
論文題名	在日汉语教学下的日本学习者动宾搭配习得 （日本における中国語学習者の「動詞＋目的語」コロケーション習得への課題）

論文内容の要旨

论文摘要（中国語）

众所周知，汉语动宾搭配在五大句法结构中结构意义最为复杂，也最为灵活，且汉语语法的诸多问题都与动宾结构相关，因此，掌握好动宾搭配是日本汉语学习者准确运用汉语语法的关键所在。在不断推进国别化教学的今天，以日本学习者汉语习得为对象的研究却不多见，尤其是以初级和中级两个级别学习者为对象的研究更是少之又少。本论文紧紧围绕日本学习者典型动宾搭配和典型动宾式离合词离析形式习得中的问题点、难点及重点进行层层剖析研究，并从认知心理学和国别化的视角深入分析和探讨，力求窥见学习者的习得状况、特点及其主要影响因素。望可将本文的研究结果利用于在日汉语教学的课堂上，改善动宾搭配教学法，提高日本汉语学习者词语搭配的运用能力。

首先，对日本初级汉语教材中典型动宾搭配的收录情况进行了考察。典型搭配是语言交流中高频出现的词语组合，典型动宾搭配习得在汉语习得中占有重要位置，本文将此作为重中之重来考察研究。本文以《日本汉语初级阶段学习指导大纲学习词汇表》中的198个名词为节点词，对日本各大学汉语专业近年使用的8本一年级教材中典型动宾搭配的收录情况进行了考察，并依据语料库语言学的研究方法，对比分析了日本本土教材和TORCH2009语料库中同节点词的典型动宾搭配的差异。结果发现，初级教材中典型动宾搭配数量收录比率较低：语料库中的低频搭配在教材中有所提及；培养学习者“读”、“写”技能的设计内容不充实等。由此建议：教材应该优先录入话题使用范围广的典型搭配；教师在教学中应把更多注意力用在高搭配频次、高搭配强度的典型搭配上，实施有效教学。

其次，对日本汉语学习者的典型动宾搭配习得情况进行了分析研究。实践证明，要最大程度地实现表达的准确性和流利度，是离不开典型动宾搭配的。也正是基于该意识，论文重点讨论了日本初、中级汉语学习者在动宾搭配接受性和产出性知识习得上的异同，并通过对其进行测试和对比分析，取得数据。在此基础上，本文又利用了 SPSS 中的单因素方差分析和曼-惠特尼 U 检验，对数据进行对比和描述性统计分析。结果发现，日本学习者搭配知识与一般词汇量的增长不共时、动宾搭配的接受性知识好于产出性知识。在学习者产出的偏误搭配中，偏误类型主要有逐词对译造成的错误和语义、语法、语用偏误及自创动词五种。根据偏误类型，将影响学习者动宾搭配习得的因素分为 3 组、6 个因素（日汉有相同语素/日汉无相同语素、动词是基本义/动词非基本义、动宾为离析形式/动宾非离析形式），对产出性和接受性测试所得数据进行了描述性统计分析和验证分析。建议教师应把学习者的学习薄弱点作为教学的强化点，帮助学习者意识到典型搭配的重要性，实现词汇与其典型搭配的同步教学。

第三、通过对20名初级学习者的前导性研究，了解到动宾式离合词离析形式的习得要难于动宾搭配离析形式。在此基础上，对两所大学汉语专业一年级48名学习者的动宾式离合词离析形式接受性和产出性习得情况进行测试实验。测试结果发现，出现的偏误类型主要有动宾式离合词带动态助词的偏误、带补语的偏误、词带宾语的偏误、带定语的偏误及介词搭配的偏误。这也再次表明，初级学习者能够正确使用的离合词仅限于几个常见离合词的常用离析形式，对离合词的全面认识还远远不够。产生偏误的主要原因为：一是汉语习得中的母语负迁移影响严重；二是离析形式的输入和输出频率不足；三是对离合词的过度泛化；四是教学因素的影响。对此，就确定离合词重点教学范围、加强离析形式的输入频率、统一各教材中离合词标记及建立离合词独立语法教学体系等问题，提出相应对策与建议。

第四、对在日汉语动宾搭配教学进行思考并提出建议。对母语负迁移影响严重、动宾搭配的产出性知识习得水平明显低于接受性知识、一般词汇量与动宾搭配知识拓展不共时的三个问题，进行了深刻的阐述与分析。在发现影响因素的同时，对在日汉语动宾搭配教学进行了反思，并对完善教材内容、改善教学方法等方面提出了一系列建议。

论文研究结果，打破了二语习得研究领域里一直以来多以“词汇习得”为对象的研究框架，为研究者们提供了以“词语搭配习得”为对象的新研究视角，扩宽了研究空间。将认知心理学理论的运用，从二语词汇习得推进到二语词语搭配习得上，为动宾搭配习得拓展了新的理论分析方向。同时，用于本文研究而自行构建的“日本本土初级汉语教材语料库”（共计654544字），以及研究结果中大量关于日本初级汉语教材的统计数据、日本初中级学习者习得情况的分析数据，可为在日汉语教学提供有效的基础数据资料。

在日汉语教学中典型动宾搭配占有重要地位。如能科学地、有效地实施典型动宾搭配的教学，将能更好地提高日本学习者的汉语水平，推动在日汉语教学。

論文要旨（日本語）

本論文は、日本人中国語学習者による典型的な「動詞＋目的語」コロケーションの習得過程を研究対象とし、検証的データに基づいて、日本における中国語教育の視点から考察を行った。調査及び実験を通じて、学習者の「動詞＋目的語」コロケーション習得の特徴を考察し、更に認知心理学の視点から習得に影響を与える要素を分析した。アンケート調査から得たコロケーションの使用状況に対する考察により、日本人学習者によるコロケーション習得の問題点及びその原因を解明することができた。本研究の成果に基づき、コロケーションの指導法を改善することにより、日本人中国語学習者の中国語の運用能力が高まることを期待する。

本研究は七章から構成される。各章の主な内容を以下に挙げる。

第一章は序論である。該当研究題目を選んだ理由、研究内容及び研究方法を述べる。

第二章は先行研究の概観である。本章では、まず各学派及び各領域のコロケーション理論を整理する。次に、国内外のコロケーション及びコロケーション習得の研究を概観し、コロケーションの類型をまとめ、更に本研究の研究対象である「動詞＋目的語」コロケーションの定義を定める。最後に、この分野についての研究の余地を示し、本論文の独創性を明記した。

第三章では、日本国内で出版された初級中国語の教材に基づいて、コロケーションの統計的指標における共起頻度を根拠とし、『日本における中国語初級段階学習指導ガイドライン』所収の名詞をノードワードとし、筆者作成の日本の初級教材コーパス（合計654544字）を利用して、日本の教材における高頻出度のコロケーションを考察した。そして、コーパスにおけるコロケーションの統計的指標を考察方法に基づき、日本の教材とTORCH2009コーパスにおけるノードワードの高頻度の「動詞＋目的語」コロケーションの差異を比較分析した。

その結果、次の三点が明らかになった。一、日本の教材における典型的なコロケーションの収録比率は実際の使用頻度を反映できていない。二、コーパスにおける低頻度のコロケーションが高頻度のものよりも多く教材の中で言及されている、また教材に出現するコロケーションは典型的コロケーションと意味が類似しているが、表現の形式は異なる。第三、「読む」、「書く」の内容は、改善する必要がある。

本章の最後では、教材の編集と教育についての提言を行った。例えば指導の際、典型的なコロケーションを導入するかたちを取ることや、学習者の中国語の語彙知識を深め、語彙間の概念ネットワークを構築すること、日本人学習者の中国語のコロケーション能力を高めるための講座を開くことなどである。

第四章では、第三章と同様に典型的な「動詞＋目的語」コロケーションを調査対象とし、主に日本人の初級および中級中国語学習者の受容コロケーションと発表コロケーション習得の差異を考察した。初級の典型的な「動詞＋目的語」コロケーションは、第三章で統計した共起するコロケーションとコーパスにおける高頻度のコロケーションとの重なる部分が使用されている。中級の典型的な「動詞＋目的語」コロケーションは、コーパス言語学理論におけるコロケーションを計る統計的指標に基づいて、現代中国語コーパスから収集したHSK4級の名詞をノードワードとした高頻度の「動詞＋目的語」コロケーションが使用されている。

本章は、実験を通じて日本人の初級および中級学習者による典型的な「動詞＋目的語」コロケーションの受容と発表に関する習得状況を比較分析した。主に次のような内容を考察した。コロケーション知識と一般語彙量の増加が正比例しない理由と、「動詞＋目的語」コロケーションの受容能力が発表能力より優れている理由である。

また本研究において、SPSSにおける一元配置分散分析（One-Way ANOVA）とマン・ホイットニーのU検定（Mann-Whitney U analyses）を利用し、データを比較分析した。その結果、日本人学習者による「動詞＋目的語」コロケーションの発表習得の誤用は、主に次の六点である。①「薬を飲む」を“喝药”に訳すように、逐語訳による間違いである。②「基準を増やす」のような意味の誤用や同義、類義語の混淆である。③文法の誤用である。例えば、“胜困难”、“齐全条件”などが挙げられる。④語用論的誤用である。例えば、「困難に打ち勝つ」を“打赢困难”に訳し、「条件が揃っている」を“含有条件”に訳すなどがある。⑤存在しない語彙を自分で作ることである。例えば“上高标准”（基準を高める）、“总括经验”（経験を総括する）などがある。さらに、本章では、このような誤用および解答欄が空白だった原因について、分析を行った。

また、筆者は、先行研究を踏まえて、日本語からの中国語訳が単語ごとに訳されたものであるか否かを判断する基準を定義し直した。筆者の定義は、日本における中国語教育ないし中日両言語の比較研究に評価する根拠と判断する基準を提供することができると言えよう。

そのほか、本章では、習得に影響を与える次の三組、６つの要素を考察した。日中両言語におけるコロケーションに同じ形態素があるか否か、動詞が基本義であるか否か、さらに、動賓が離れるタイプ（動詞と目的語が離れるタイプ）であるか否か。

発表コロケーションの習得において、初級グループの分析結果では、「日中両言語に同じ形態素があるか否か」、「動賓が離れるタイプであるか否か」という二つの要素が影響をもたらす。一方、中級グループの分析結果では、「動詞が基本義であるか否か」と「動賓が離れるタイプであるか否か」とが中級学習者による発表コロケーション習得に影響をもたらす。受容コロケーションの習得において、初級組と中級組の分析結果は同じであり、「日中両言語には同じ形態素があるか否か」が、コロケーションの習得に影響をもたらす。

実験の結果に基づいて、本章では、学習者が有効にコロケーション知識を習得できるか否かは、一般語彙がどのように教授されるかによると考える。語彙の典型的なコロケーションの形式で教材に現れるか否か、教師が授業で語彙の典型的なコロケーションの形式を使うまたは語彙を文脈に入れる方法で説明し、教授するか否かは、学習者の習得効果に大いに影響を与える。このように、「動詞＋目的語」コロケーションの習得効果は、教授法によって大いに異なることが明らかになった。

第五章では、日本人初級中国語学習者による「動詞＋目的語」コロケーションの習得における難題を考察し、そして焦点を難題中の難題である動賓離合詞に置く。

そのために、まず、日本の初級中国語の教材に収録されている動賓離合詞を分析した。次に、受容と発表習得のテストを通じて、初級学習者の習得状況と誤用を考察し、次のように誤用の原因を分析した。中国語習得における母語の負の転移、離合詞のインプットとアウトプットの不足、過剰一般化と教育要素の影響である。最後に、初級指導における重要な離合詞の範囲を定め、更に教育への提言も行った。

第六章では、認知心理学の視点から、第四章と第五章で提示した重要な問題について解説し、認知心理学の理論を用いて次の三つの問題を説明した。

一つ目の問題は、日本人学習者によるコロケーションの習得に母語干渉がもたらす影響である。1)日本語における文化的背景が中国語の語彙の識別及び記憶過程に影響する。2)日本語の性質により、日本人中国語学習者は中国語語彙を個々の漢字として分解し記憶する傾向がある。3)日本語の語彙的なコロケーションの規則が、中国語の語彙的なコロケーションの習得に負の転移をもたらす。

二つ目の問題は、典型的な「動詞＋目的語」コロケーションの発表能力が、受容能力より劣っている理由である。1)言葉のインプットの側面から言えば、学習者は新しい単語や新しい意味に触れる機会が少ない。 2)受容型の問題を中心とする試験形式が多い。3)語彙の習得方法が単一しかない。

三つ目の問題は、一般的な語彙量と「動詞＋目的語」コロケーションの発表能力との相関関係が存在しない原因である。1) 第二言語学習者の語彙の統語的関係(syntagmatic relation)と範列的関係(paradigmatic relation)の発展が不均衡である。2)第二言語としての心内辞書(mental lexicon)の構築は、本質的に母語としての心内辞書と異なる。

本章の最後では各問題に対し、教育への対策を提言した。

一つ目は、日中両言語の比較及び、学習者がその差異に気づく意識を培うことを「動詞＋目的語」コロケーションの習得に役立てることである。

二つ目は、日中両言語におけるコロケーションの共通点による正の転移を十分に利用することである。

三つ目は、典型的なコロケーションの形をインプットすることが、語彙習得における最善の方法であると主張する。

第七章では、本研究の結論をまとめ、本研究の在日中国語教育及び研究への理論的意義と実践的意義及び教育的指導における意義を示した上で、今後の研究の方向性を論じる。

日本人中国語学習者の中国語の運用能力を向上させることは、本論文の出発点でもあり、最終目的でもある。本論文は、日本人中国語学習者による典型的な「動詞＋目的語」コロケーションの習得を中心とした考察により、典型的な「動詞＋目的語」コロケーションが、在日中国語教育において重要な位置を占めることを明らかにした。また、科学的かつ有効に、典型的「動詞＋目的語」コロケーションの指導を実施すれば、日本人学習者の中国語能力をさらに高め、在日中国語教育に貢献できると思量する。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　李　佳　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	古川　裕
	副 査　教授	青野繁治
	副 査　准教授	林　初梅
	副 査　特任准教授	張　恒悦
	副 査　助教	中田聡美

論文審査の結果の要旨

《在日汉语教学下的日本学习者动宾搭配习得》（『日本での中国語教育における日本人学習者の動詞目的語コロケーションの習得』）と題する本論文は、日本において中国語を学ぶ、日本語を母語とする学習者を被験者として、動詞と目的語名詞のコロケーション習得過程を調査し、その調査結果に基づく統計的分析を行い、コーパスによる検証を通じて問題の原因を考察し、今後の対日本人中国語教育に資する提言を行った労作である。

本論文は、以下の全七章から構成されている。
第一章序論では、本論文の研究目的、研究内容、研究方法を述べている。
第二章では、コロケーション及びコロケーションの習得に関する国内外の先行研究を幅広く紹介し、当該分野の研究情況を幅広く概観している。
第三章では、日本で出版された初級中国語の教材八冊を取り上げて、これらの教材にあらわれる動詞と目的語名詞のコロケーションを考察している。ここでは、本論の筆者が自ら作成した初級教材コーパス（合計654,544字）を使用して、目的語となる名詞をノードワードとした計量分析を行い、日本の初級中国語教材が高頻度のコロケーションを十分に提示できていないことを実証し、将来の教材編集への適切な提言を行っていることが評価できる。
第四章では、初級および中級レベルの日本人中国語学習者を被験者として、典型的な動詞と目的語名詞のコロケーションに関する受容能力と産出能力について行った筆記テストのデータを分析している。
第五章では、日本人中国語学習者にとって習得の難度が極めて高い離合詞タイプの動詞と目的語名詞を取り上げ、前章と同様の筆記テストによって得られたデータに基づいて習得上の問題点と教育対策を述べている。ここでは特に日本語の漢字語と同形の中国語を取り上げており、日本語母語話者ならではの問題に着目している点が評価できる。
第六章では、認知心理学の角度から前二章で明らかになった問題点の原因を探っている。特に、日本語母語話者にとって漢字の知識は諸刃の剣とも言うべきものであり、その負の側面である母語干渉を強調している。
最後の第七章では、本論文で得られた知見をまとめ、今後の中国語教育および研究に貢献する点を指摘し、将来の研究に残された課題を指摘している。

本論文は全編を通して、流暢で洗練された現代中国語の書面語によって明確に記述されている。中国語を学習する前から漢字知識を有する日本人学習者に研究対象を絞ったことで、一見すると新規性に欠けるテーマが独創的な新しい研究へと質を変えている。
また、コーパスを利用した収集した大量のデータを統計的に処理していることも結論を補強している。

本論文にはこのように優れた点が多いのと同時に、視覚的な書記文字としての漢字の「読み、書き」にのみ着目し、音声としての中国語の受容と産出（聴き、話す）について論じていない点は本研究の瑕疵であると言わざるを得ない。また、本論文は基本的な動詞と目的語名詞のコロケーションのみを論じ、中国語の文が適切に完成する際に求められる動詞および名詞の形態構成についても充分な考察がなされているとは言い難い。これらの問題は今後このテーマをより深く考察するうえで継続して研究されるべき課題である。

以上のことを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるのにふさわしい論文であると判断した。